

センスイでも母親でもない
踊っているときがワタシ…

佐藤夏子さん
藤沢



ご自宅への道を、自転車のペダルをからだ全体で踏みながら車を先導してくださった佐藤さんは、陽気で気さくな小学校の先生。初めてお会いしたときから、友達感覚でテンポの速い会話が弾む。部屋にはご自分で描いた50号の油絵が数点。それだけでもうらやましい“ゆとり”なのに、この先生もう一つ、あのスペインの情熱的なバイオラーラ、フラメンコダンサーの顔をもつ贅沢人！



佐藤夏子 さとうなつこ
福島県出身。69年福島大学教育学部卒業。川崎市立西御幸小学校に赴任。以来教壇生活26年。現在藤沢市立辻堂小学校教諭。72年、河上鈴子スペイン舞踏研究所入所、82年田中美穂フラメンコ教室でフラメンコを習う。渡西5回。その間、ローリー・フローレンス、エル・トレオほか多くのスペイン人についてフラメンコを習い、現在ディエゴ・アマジャ他に師事。87年第1回フラメンコリサイタル（藤沢市民会館大ホール）ほか茅ヶ崎市民文化会館大ホール、東京ABC会館などでリサイタル。藤沢市片瀬在住。

庶民の哀感を強く、激しく 民話の世界をフラメンコで

——三年ぶりのリサイタルというこ
とですが…。

大震災の被災地に寄付させていただ
こうと…」

「一月九日に新宿の朝日生命ホール
で、十二日に地元の藤沢市民会館で
開きます。今回は収益の一部を阪神

——演出、構成もご自分でなさるん
ですね。
「ええ、今回は秋田の古い民話をも

とに、私が振り付け、創作したオリ
ジナル作品『龍子（たつこ）』を中
心に踊ります。メインギターには、
スペインだけじゃなく世界の舞台上で
活躍されているフラメンコギターの
大御所ディエゴ・アマヤが共演して
くれます。スペインの古い曲、ソロ
ンゴを踊るのもとっても楽しみです。

『龍子』は、田沢湖にまつわる悲話
をもとに創作しました。世界一の透
明度を誇りながら、死の湖といわれ
る田沢湖が舞台です。龍となって湖
を守る一人の娘の物語。背景には流
れ込む川の毒水に悩まされ続ける湖
周辺の人々の貧しく悲しい暮らしが
あります。自然を破壊したものにへの
怒りを表現するつもりです。スペイ
ンの踊りフラメンコは、しいたげら
れた貧しい民族の怒りや嘆きを踊り
に訴えるようになったものですから」

——その意味では、日本の民話にも
共通の題材がたくさんありますね。
実らぬ恋の物語とか…。

「ええ、そんな人の悲しみを、いわ
ばど根性でけ飛ばし、振り払おうと

して踊る……。だから、たたきつけるようなステップで、エネルギーッシュに踊るんですね」

——舞台での佐藤さんは大きく見えますね。

「衣装はおよそ4キロぐらいあります。みな自分でデザインして、スペインに特注することもあります。フリルがたくさん付いていて長いので足さばきにコツがいりますけれど、なれば苦になりません。衣装をつけ、舞台化粧をして変身すると、ふしぎに大胆になれるんです。ダイナミックな踊りも特別無理をしているわけじゃなく、ごく自然にリズムに乗ってしまえるんです」

——小柄でいかにもきゃしゃな身体つきの佐藤さんのどこにそんなバイタリテイが……

「私は大学生時代には乗馬クラブに属していました。九年前に他界した夫がキャプテンをしまして、競馬場の休馬を借りて乗ってました。かなりのあばれ馬もこなさなければなりません。仲間に『落馬の名人』って言われるほど、よく落ちました。その頃のトレーニングが基礎になっているのかも知れませんね」

——フラメンコを始めたきっかけは？
「もう亡くなられましたが、二十年前に日本のスペイン舞踊の草分けである河上鈴子さんの舞台を見て興味

をもち、ちよつとした楽しみのつもりで始めたのが、こんなのにめり込むことに……。先生の人柄や日本人離れしたものの考え方に惹かれたこともあります。人間は感性を豊かにしておくことが大切だってことをよくおっしゃってました。いいものにくさん触れなさいよって」

——ご本業は小学校の先生。現在辻堂小学校で二年生をご担任でいらっしやいますが。

「生徒たちとすごす時間は私にとってかけがえのない大事な時間です。私は学校が好きなんです。忙しいのが性にあつてる。でも、スタジオに出かけて踊ることも私の日常から切

り離せません。生活の一部なんです。二つのことがあるから両方やれるんだと思うの。日曜日、時間がいっぱいあるときより、むしろ仕事が終わって夜遅く稽古場に行くときのほうが充実して、ほしいものを手にいれた嬉しさがあるんです。まったくべつの自分になれる楽しさというか……。そう、フラメンコを踊るときの私はセンチでもなく、二人の娘の母親

だってことも忘れてる。人生にはだれだって辛いことや悲しいことってあるでしょ。それをみんな踊りに変えちゃうの。私にとって幸せな時間、贅沢してるって感じ……。私は人には「ねあか」って言われますが、今のフラメンコはとでもリズムカルに踊るんです。それが私と相性がいいのかも知れませんが。あのギターの強烈な音も大好き」

僧侶がうたう和讃にあわせ…… 新しい創作にも挑みたい

——ご主人を亡くされた悲しみを踊りに？

「亡くなる前の一年間、藤沢から信濃町の慶應病院まで毎日通いました。その間周りの人たちにずいぶんとお世話になりました。下の娘が小学校二年でしたから、近所の人たち、職場の仲間たちの応援がとても支えになりました。夫の葬儀には教え子をはじめ、千五百人もの人たちが参列

してくれました。そうした方々にどうお礼しようかと考え、追悼リサイタルを思い切って開きました。主人の好きだった口笛とハーモニカ、茅ヶ崎の曹洞宗の寺の僧侶が歌ってくれた和讃に合わせて自分で振り付け、演出して踊ったんです。会場は藤沢市民会館でした」

——いろいろな思いのこもった舞台……、いかがでした。

「ええ、皆さんとっても喜んで下さって、その後、藤沢や茅ヶ崎の市民会館などで創作舞踊を中心にリサイタルを開きました。三年前の茅ヶ崎では、フルートでスペインの男性舞踊手トレオと夕鶴を、また6年前には、おかめ、はんにゃ、からす天狗、大黒天の四面を使つての創作をまじえた踊りは好評でした。伝統を重んじる人たちには異論があるかも知れませんが、民話とフラメンコを理解してもらうためにも、新しいスタイルでもっととチャレンジをしていきたい。だから、ときどきスペインにでかけて本場のフラメンコを吸収しに行くんです」

(S)